

# 終助詞「よ」「ね」「よね」の談話機能：中国人日本語学習者を対象とする指導法の開発に向けて

顔, 暁冬

<https://hdl.handle.net/2324/1398296>

---

出版情報：九州大学, 2013, 博士（比較社会文化）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



氏名・(本籍・国籍)	ガン キョウトウ 顔 暁冬 (中国)
学位の種類	博士 (比較社会文化)
学位記番号	比文博甲第212号
学位授与の日付	平成25年9月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 比較社会文化学府 日本社会文化専攻
学位論文題目	終助詞「よ」「ね」「よね」の談話機能 —中国人日本語学習者を対象とする指導法の開発に向けて—
論文調査委員	(主査) 教授 松村 瑞子 (副査) 教授 山村 ひろみ 教授 井上 奈良彦 准教授 西山 猛 北九州市立大学 名誉教授 山崎 和夫

## 論文内容の要旨

1990年代以降、日本語の終助詞、取り分け談話における「よ」「ね」の機能に関する研究が盛んに行われるようになった。しかし、これらの研究の多くは言語分析のみを目的としており、日本語教育への応用にまで繋げようとしているものは未だ少ない。そこで、本研究は、終助詞「よ」「ね」「よね」に対する分析結果を実際の教室活動に生かすことで、中国人日本語学習者に対する効果的な終助詞の指導法を提示することを研究目的とする。

本研究では、先ず収集したインタビュー会話のデータを用いて、日本語話し言葉において高い頻度で使用されている終助詞「よ」「ね」「よね」の用法を分析することで、その談話機能を明らかにした。次に、中国人日本語学習者のロールプレイにおける終助詞「よ」「ね」「よね」の使用に見られる問題点を抽出した。さらに、中国における日本語教育現場で使われている日本語教科書の問題点を抽出し、中国人日本語学習者の問題点を勘案した上で、改善の方策を提案した。最後に、

テレビドラマなどの映像教材を利用して、終助詞を中心とした話し言葉に特有な言語現象を指導することの必要性及びその有効性を、実際の教室活動における成果を用いて実証的に示した。

第1章～第3章では本研究の目的、先行研究、会話データと研究方法について述べた。

第4章以降が本研究の本論であり、第2章の先行研究を踏まえ、第3章の研究方法に基づき、終助詞「よ」「ね」「よね」それぞれの談話機能を明らかにした。

第4章では、終助詞「よ」の談話機能を考察した。まず、終助詞「よ」の使用概況を調査したところ、使用率は9%であるが、年代・性別による差異が明確に現れた。次に、談話データを分析した上で、終助詞「よ」の本質的な談話機能を「発話者の情報優位性を指標するマーカーである」と定めた。更に、情報縄張り、待遇性、会話管理の3つの角度から終助詞「よ」の談話機能を考察した。最後に、終助詞「よ」と文末表現「のだ」との共起関係を明示し、自然会話によく使われる理由を考察した。

第5章では、終助詞「ね」の談話機能を考察した。まず、終助詞「ね」の使用概況を調査した結果、出現率は32%であり、年代・性別による使用差異は明確には現れなかった。また、談話データを考察した上で、終助詞「ね」の本質的な談話機能を「話し手の認識を聞き手が当然受け入れることを前提とし、情報共有性を指標するマーカーである」と定めた。更に、情報縄張り、待遇性、会話管理の3つの角度から終助詞「ね」の談話機能を考察した。最後に、間投助詞の「ね」、非文末「ですね」などの用法を取り出し、それぞれの談話機能を明らかにした。

第6章では、終助詞「よね」の談話機能を考察した。まず、終助詞「よね」の使用頻度は、総発話中7.5%の出現率であった。また、談話データを考察した上で、終助詞「よね」の本質的な談話機能を「話し手の認識を聞き手に確認するという手続きを経て、情報共有性を指標するマーカーである」と定めた。さらに、情報縄張り、待遇性、会話管理の3つの角度から終助詞「よね」の談話機能を考察した。最後に、「よね」が使用されると話題転換が起こることが多いことを実証した。

第7章は、終助詞「よ」「ね」「よね」の談話機能を比較対照し、それぞれの使用特徴をまとめた。

第8章では、中国人日本語学習者の終助詞「よ」「ね」「よね」の使用上の問題点をまとめた。まず、中国における日本語教育事情を概観し、中国における社会的ニーズに適応できる人材を養成することが、中国における日本語教育における課題であることを確認した。また、中国人日本語学習者を対象とする動機付け調査からは、次の2点が判明した。1つは学生の37%が、日本のポップカルチャーに触れることを通して日本語を知り、それを学習することになったことである。もう1つは、学生は自身の運用能力に自信を持っていないことである。この調査結果を勘案の上、中国人日本語学習者の運用能力を確かめるために、ロールプレイによる談話データを分析した。その結果、終助詞「よ」「ね」「よね」の使用について、情報縄張りに関わる終助詞「よ」「ね」の誤用と、待遇性に関わる終助詞誤用が、学年を問わず確認された。最後に、教材分析を通して、中国の大学における日本語教育、特に終助詞「よ」「ね」「よね」の指導において現れる問題点を指摘した。

第9章では、第4、5、6章で考察した終助詞「よ」「ね」「よね」の談話機能をもとに、中国の大学において、映像素材を利用して実際の教室活動を行うことによって、その指導法の妥当性を検討した。まず、学習者のニーズ調査をした結果、「90後」の中国人日本語学習者は、日本語を学習する際、伝統的な文型を中心とする教育方法だけでは満足せず、実用性に結びついた教授法を望んでいることが分かった。この結果を踏まえ、中国人学習者に求められている日本語教育のあり方とは何かを考察し、映像素材を利用したコミュニケーション諸能力の向上に直結した教授法を提示した。その教授法を用いて、テレビドラマなどの映像素材を利用し、終助詞「よ」「ね」「よね」を指導する教室活動を3回にわたって実施した。授業の後学習者に対する調査を行った結果、学習者が終助詞「よ」「ね」「よね」についての理解を深めており、また学習内容にも興味を感じているとい

う結果が得られた。

第10章では、本研究をまとめ、今後の課題について述べた。

本論文では、談話分析を行うことで、終助詞「よ」「ね」「よね」の談話機能や使用条件を明らかにすることによって、中国人学習者の終助詞に対する理解を向上させるための方策を示した。この結果は、談話分析という手法を中国の日本語教育現場へ応用するための方向性を示すことができたという点で有意義であるといえる。

## 論文審査の結果の要旨

日本語の終助詞、取り分け談話における「よ」「ね」の機能に関する研究は、今日まで盛んに行われてきた。しかし、これらの研究の多くは言語分析のみを目的としており、日本語教育への応用にまで繋げようとしているものは少ない。そこで本研究では、談話分析という手法を取り入れながら、談話における「よ」「ね」「よね」の用法を、効率的に中国人日本語学習者に指導するための指導法を提示することを研究目的とした。

まず、自ら収集した日本語母語話者のインタビュー会話のデータを用いて、高頻度で使用されている終助詞「よ」「ね」「よね」の用法を分析することで、その談話機能を明らかにした。次に、中国人日本語学習者のロールプレイにおける終助詞「よ」「ね」「よね」の使用に見られる問題点を抽出した。更に、中国の日本語教育現場で使われている日本語教科書の問題点を抽出し、中国人日本語学習者の問題点を勘案した上で、改善の方策を提案した。最後に映像教材を利用した実際の教室活動を行うことで、本研究の有効性を実証的に示した。

第1章から第3章では、本研究の目的を述べ、先行研究を概観し、研究方法について述べた。

第4章では、終助詞「よ」の談話機能を考察した。終助詞「よ」の使用率は9%であるが、年代(年上>年下)・性別(男>女)による差異が明確に現れた。談話データを分析した上で、終助詞「よ」の本質的な談話機能を「話し手の認識の優位性を指標するマーカーである」と定めた。「情報縄張り」「待遇性」の観点から、典型的には話し手の縄張り内情報を提示すること、「のだ」+「よ」が高い割合を占めること、聞き手の縄張り内情報には使われにくいこと、「会話管理」の観点からは、「あいづち」が高い割合で後続していることを示した。

第5章では、終助詞「ね」の談話機能を考察した。終助詞「ね」の出現率は32%と高いが、年代・性別による使用差異は明確には現れなかった。談話データを考察した上で、終助詞「ね」の本質的な談話機能を「聞き手に認識の共有性を確認するマーカーである」と定めた。「情報縄張り」「待遇性」という観点からは、「ね」は聞き手の縄張り内情報に対する確認を求めるものが典型的であること、「のだ」+「ね」は8%と低い割合であること、待遇的には聞き手との一体感を作り出すのに使われていること、「あいづち」の後続の割合は低いことが明らかになった。さらに、間投助詞の「ね」や非文末「ですね」の談話機能を明らかにした。

第6章では、終助詞「よね」の談話機能を考察した。終助詞「よね」の使用頻度は、総発話中7.5%の出現率であった。談話データを考察した上で、終助詞「よね」の本質的な談話機能を「話し手の認識を聞き手に提示し、聞き手から共感を求めようとするマーカーである」と定めた。「情報縄張り」「待遇性」については、「よ」とは異なり聞き手の縄張り内情報であっても話し手の認識の真偽を聞き手に確認することによって共感領域を作り出しながら失礼にならずに使われうること、「会話管理」の観点からは、「話者交代あり」が66%と非常に高いこと、さらに「よね」が使用されると話題転換が起こることが多いことが明らかになった。

第7章では、教育の現場に活用するために、終助詞「よ」「ね」「よね」の談話機能を対照させた。まず、「情報縄張り」という観点から、夫々の終助詞を話し手縄張り内情報、聞き手縄張り

内情報に対して使用される割合について対照させた。また、「待遇性」との関わりについては、夫々の終助詞が失礼になりやすい場合について明らかにした。最後に、「会話管理」の面から、話者交代、相槌挿入の割合などについて対照を行い、学習者への教授内容について考察した。

第8章では、中国の大学生にロール・プレイをさせて、終助詞の使用実態を調査した。分析の結果、「よ」の使用率が15.8%と日本人より高いのに対し、「ね」の使用率は12.3%と低く、さらに「よね」は0.1%と殆ど使われていないという使用概況が明らかになった。また、「情報縄張り」「待遇性」「会話管理」についても不適切な使用が数多く確認された。最後に、これらの分析結果を基にして、「情報縄張り」「待遇性」「会話管理」の夫々について重点的に教授すべき内容を明らかにした。

第9章では、前章までの考察を踏まえて、重点的に教授する必要があると考えられる終助詞「よ」「ね」「よね」の用法を映像教材を利用して教授する方法を案出し、実際の教室活動を行った後、その効果について論じた。第10章では、本研究をまとめ、今後の課題について述べた。

本論文の研究意義としては、自ら収集した日本語母語話者のインタビュー会話のデータを用いて終助詞「よ」「ね」「よね」の用法を「情報の縄張り」「待遇性」「会話管理」の観点から分析し、その結果を日本語教育現場に応用する方法を提示したという点にある。その分析過程において「のだ」との共起関係、「よ」と「よね」の待遇性の相違等、これまで論じられることのなかった点を明らかにすることができた点が高く評価された。また、これらの談話機能に関する結果を、日本語教育の教室活動に取り入れる方策を提示した点も、審査委員から評価された。以上の理由で、調査委員会は本論文が博士（比較社会文化）の学位を授与されるに十分な内容を有するものであると判断した。